

## 生徒の学習意欲を掘り起こし、

## 英語の学力をつけるための工夫——1年次——

高橋 恵亮 倉田 有邦 久保萬里子  
宮 田 学 山田 雄一

### 〔I〕 基本的なことから の定着と興味・関心の 高まりを目指した中学二年での実践

宮 田 学

#### 1 ま え が き

教室における英語学習を効果あるものにするための要因には様々なものが考えられるが、とりわけ、学習主体である生徒たちがどのような興味・関心を持って授業に臨んでいるかということが重大なポイントとなる。言語の学習には、基本的な練習のくり返しがどうしても避けられないので、ともすると、生徒たちは目先のことにとらわれ、地道な努力を放棄してしまうことがある。

中学一年生の英語学習に対する意欲は相当なものである。中学生になったということを実感するいくつかの要素の中に、「英語を習う」ということがあり、初めて接する外国語の学習に自然と興味を示し、期待感を持って授業に臨んでくれる。小学生の頃からの習慣もまだ十分に残っており、大きな声で教師のあとについて発音する。単調となりがちなアルファベットの練習、簡単な英文をくり返して言う練習などにも積極的に参加してくれる。これは、いわば「内的な動機づけ」ができているからであって、教師の側からはそれほど工夫しなくても、生徒たちには学習に向けての準備がしっかりなされているのである。

しかし、一年生も半ばを過ぎた頃から、生徒たちの間に生じてくる英語力の差が次第に目につくものとなるにつれて、授業に興味を示さない生徒が現われてくる。コツコツとくり返して練習することを怠りがちな生徒は、英語はめんどうな科目だと思い始める。二年生になる頃には、いわゆる英語のできる子とできない子が固定し始め、同時に、学習内容が高度化するにつれ、英語ぎらいが出始める。英語学習に対する意欲は、このようにして、次第に減少してゆくことになる。各

地の中学校には、ここ数年間、非行化・暴力化の波が打ち寄せ、英語の授業そのものが成り立たない状況さえ生まれてきている。

幸い、附属中学校では、校内暴力などの現象は今のところ出ていない。生徒会で「チャイムが鳴ったら着席しよう」運動を取り上げれば、一応、廊下に出ている生徒の数が減少するような現状である。従って、教師がその気になれば、生徒たちの学習意欲を掘り起こし、英語の学力をつけさせるべく、授業を展開することが可能なのである。

#### 2 動機づけと学習意欲

生徒たちがものごとに取り組む時には、内的な動機と外的な動機とがある。学習心理学の分野では、内的な動機づけをするのが本来の望ましい動機づけであるとされるが、英語学習においてはどのように考えるのがよいであろうか。

中学一年生の頃の素朴な英語学習への興味やあこがれは、内的なものとはいえ、そのまま長つづきはしてくれない。逆に、そうした興味・関心は、くり返し行わなくてはならない地道な練習という要求の中で、次第に薄らいでゆく。英語学習が苦痛となっているような生徒を見かけることもあるのである。この辺の事情を少し考えてみなくてはなるまい。

今仮りに、1人の中学生の心の中に英語に対する興味・関心が生じたとしよう。この内的な動機は、目的となる英語学習における成就感がなければ、長つづきはしないであろう。興味・関心が持続するためには、その興味・関心そのものの質的な向上が不可欠である。単なるあこがれの的なのが、英語学習によって、「次はこんなことを知りたい」、「あんなことが言いたい」、

「こういうことがわかった」ということによって、次第に質の高い興味・関心となる。このサイクルが成立すれば、自発的な学習も可能となり、持続力のある英語学習が実現される。

この場合、外的な動機づけは、どのような役割を果たすのであろうか。極端な例としてよく取り上げられる外的動機づけに「入試のため」というものがある。確かに、「入試のため」という動機だけで学習が成立しているとしたら問題であり、本来の英語学習も損われるかも知れない。しかし、だからと言って、「入学試験」という動機で学習することから始まったとしても、生徒を責めることはできない。生徒たちを取り巻く環境の中に受験科目としての英語がある限り、そのことによって動機づけられること自体は、やむをえないことである。むしろ、こうした外的な動機づけで始まった（としても、その）学習の過程において、内的なものへと質的な変化をもたらすことが可能であるし、内的な動機に外的な動機をうまく結び合わせてゆくことが、息の長い外国語の学習では、必要となってくると思われる。

ともすると苦痛を伴いがちな外国語の学習を生徒たちが意欲を持って続けられるように、教師はあらゆる手段を講ずるべきである。方向としては、生徒たちの間に、英語学習に対する内的な動機が持続するように、外的な働きかけを行ってやることである。そのためには、授業の展開における単調さの克服、わかりやすく楽しい授業を行うこと、応用・発展のきくような工夫をすること、英語国民の文化にも目を向けさせること、学習の成就感を味わえるようにすること、学習の遅れがちな生徒に対する配慮・指導を加えること、等々が必要となつてこよう。

### 3 学習意欲と英語の学力

学習意欲を英語の学力との関係からながめてみると、生徒たちを次の3つのタイプに分けることができよう。

第1のタイプは、英語が好きで意欲的に取り組んでいるが、さらに別の刺激を与えることにより、一層学習への意欲が増す生徒。この生徒たちは、たいてい自分自身で工夫して自主的に学習ができ、家庭でも英語学習のパターンを自分なりに確立している。復習だけやればよいと言われても、つい、先へ先へと目が向くことが多い。彼らに対して教師側から特別に配慮する必要がないように思えるが、彼らなりの充実感を味わえるように授業を工夫したり、課題を与えてやる必要があろう。そうしないと、学校の授業にはあき足らず、不要な塾通いを始めたり、問題集を買って、高度な内容に自分を追いこんで、かえって混乱するようなことになりかねない。

第2のタイプは、数の上で一番多いと考えられるが、英語が特に好きというわけでもないが、とりあえず授業の内容はよくわかるし、英語の学力もそれなりにつきつつあるので、平均的な課題を消化してゆく生徒である。こうした生徒たちは、授業中も家庭においても、一応自分なりのスタイルで学習に取り組めるが、時々、むずかしい内容に出会ったり、自分の怠慢で基本的な学習を欠いたりしたような場合に、学習意欲を失う恐れが多分にある。いわば、学習意欲を持続できるか否かが最大の鍵となる生徒たちであり、教師側としては、これらの生徒たちに対して常に動機づけをしてやる必要が生じる。このタイプの生徒の中には、学習塾や家庭教師の手を借りて、ようやく英語の理解力を保持しているという生徒が含まれることも予想されるので、彼らが他人の手を借りずに、授業と自分自身の復習で学力を維持できるようにしてやるのが望ましい。

第3のタイプは、とにかく英語があまりよくわからない、嫌いなほうであるという生徒たちであり、従って、学習意欲をすでに失っているか、意欲が減少しつつある生徒である。この生徒たちは、中1の頃に持っていた期待感を裏切られたという感じを抱くことが多いが、これは、結局のところ、英語の学習方法がわかっていなかったり、わかかっていても毎日のくり返しという基本的な学習態度・習慣が備わっていないために、「やらない→できない→わからない→いやになる」という悪循環を生じてしまっているからである。こうした生徒の多くは、簡単な聞く・話す作業（教師やテープのあとについてくり返して発音したり、質問に Yes, No で答えたりすること）はできても、それを文字を用いて読み書きできないという場合が見うけられる。音の記憶だけでは忘れてしまう率が高いので、目の記憶・手の記憶の段階まで引き上げてやらなくてはならない。そうしないと、家庭での自学自習もできなくなってしまうからである。筆者の経験では、こうした生徒たちも、適切な指導・助言を与えれば、少なくとも単語を見て発音し、教科書の本文を音読できるようにはなるものである。従って、教師側としては、彼らが自分の力で復習することができるように、まず授業中に新出単語・連語の発音練習、本文の音読練習をしっかりとやらせるようにするとともに、必要に応じて単語の整理状況を点検してやったり、一緒に教科書を読む練習をしたりして、彼らが自信を回復できるように配慮すべきである。

1つのクラスには、こうした3つのタイプの生徒が集まっているわけであり、しかも一人ひとりが微妙に異なった意欲・学力・性格を持っている。従って、クラス全体を対象にした一斉授業の中で一人ひとりに訴えるような働きかけはなかなかできないが、しかし、

各生徒がそれなりの学習意欲を保持し、高められるように工夫してやらないと、現在の週3時間体制の中では、早くも中1の二学期頃から落ちこぼれを出してしまうことになりかねないのである。

以上のような問題意識を持ちながら、昭和58年度の中学二年の生徒たちを指導したので、その指導内容・方法について報告することにした。

#### 4 中学二年における授業の基本方針と授業例

58年度の中2に対しては、中1の時からひきつづいて英語を教えたので、その延長線上で無理をせずに徐々に中学二年にふさわしい英語の授業作りをしていった。通常の授業は、次のような基本方針で臨んだ。

- 1) 予習をまったく前提としない。
- 2) フラッシュ・カード、ピクチャー・カード、録音テープなどの教具を毎回使用する。
- 3) 単語の発音、本文の音読指導に十分時間をかける。
- 4) 新出の文法・句型事項は、まず口頭で導入することを原則とするが、場合によっては板書してから行うなどの工夫をする。
- 5) 教科書の目標文にとらわれず、応用・発展のきく英文を念頭に置いて練習させる。
- 6) 口頭での練習が単調にならぬよう、パターン・プラクティス、口頭英作文、英問英答、絵の利用など様々なバリエーションをもたせる。
- 7) クラス全体の練習と個人指名とのバランスをとる。
- 8) 本文は全訳することを極力避けるが、一方、重要と思われる英文は必ず日本語で意味を考えさせる。
- 9) 適宜、句型・文法・語法上のまとめを行う。
- 10) 必ず宿題を出し、家庭での復習を励行する。
- 11) 同時に、原則として毎回前時の復習を行い、その一部に小テストを実施して、家庭学習での復習の習慣を徹底させる。
- 12) 小テストは、ディクテーション、英問英答、英作文など毎回異なった形式にし、小テストがあるまで生徒には知らせないでおく。
- 13) 重要な文法・句型事項（例えば、過去時制、受動態など）は、教科書の配列にとらわれず、「まとめプリント」を自作して、その項目に関する全体像をつかませる。
- 14) 適当な機会を設けて、自由英作文、グループ活動、物語の鑑賞などの学習を組み入れる。
- 15) ビデオ教材の利用を考える。

第1回目の授業で生徒たちに説明しながらノートさせた「中2の英語学習10ヵ条」を示しておく。この中にも、筆者の指導方針が盛り込まれている。

- (1) 復習中心、授業中心；予習は不必要
- (2) 単語ノートを作る
- (3) 授業に集中（大きな声で、ハキハキと、授業中におぼえてしまう）
- (4) すべて日本語に直す必要なし
- (5) 重要な英文は暗唱する
- (6) 必ず声を出して本文を読む
- (7) 単語のつづりはその日のうちにおぼえてしまう
- (8) 宿題は必ずやる
- (9) ワークブックは英語のない日にやっておく
- (10) 1課終了ごとに、読み、単語、練習問題、ワークブック再確認

以上、授業作りの基本としていることがらを述べてみたが、ここで、具体的な授業展開を理解していただくために、次ページに学習指導案の一例を示しておくことにする。〔資料—1〕

#### 5 小テストについて

英語が週3時間の現行指導要領が実施されてから、復習の小テストを実施しなくなった学校が多いように聞いている。確かに、小テストを実施すると5分程度の時間が必要とされるので、時間数が少なくなった状況では小テストの実施に二の足を踏む気持ちがわからないでもない。しかし、小テストを実施しない場合、生徒たちは、どうしても家庭学習（復習）を怠りがちである。少なくとも、不徹底になりがちである。小テストを課すことは、まぎれもなく「外的動機づけ」である。「テストがあるから」という理由で、生徒たちは家庭での復習、テストのための学習を余儀なくされるからである。自分から自発的に「この単語をおぼえよう」、「この英文をマスターしよう」とはしないからである。しかし、時間数が多かろうと、少なかろうと、学校で生徒たちが英語に接する時間の絶対量はわずかなものである。積み重ねが必要な語学においては、生徒たちが、授業時間内で行ったことを家庭において反復練習することなしには、次の段階への前進はなかなか達成できない。むしろ時間数の減った現在でこそ、生徒たちが家庭で反復練習し、次時の授業内容へと結びつける努力を期待しないと、非効率な学習をしてしまうことになる。

そこで筆者の場合は、「前時の復習」の段階で小テストを実施することを原則としている。ただ、小テストの採点が済むと、以前は次回の授業の冒頭で返却し、採点上気づいたことに言及して生徒たちの誤りなどを

[資料-1] 学習指導案 : Lesson 6, Part 2 ("New Horizon English Course 2" 東京書籍)

| 過程  | 指導内容  | 学 習 活 動   | 指導上の留意点  |
|---|---|---|--|
| 1   | あいさつ  | T: Good morning, class. C: Good morning, Mr. M.   | 大きな声で元気よく。   |
| 2<br>前<br>時<br>の<br>復<br>習                          | (1) Part 1 新出語句の練習<br>(2) 本文の聞きとり<br>(3) 本文の音読<br>(4) 宿題の答合わせ<br>(5) 小テスト                   | フラッシュ・カードで単語・連語の発音練習: 英語、日本語をみて英語; 生徒だけ; 教師のあとについて。<br>教科書を閉じたまま、テープを聞く。<br>①教師のあとについて ②テープのあとについて読む。<br>③個人で練習 ④指名された生徒が読む。<br>Exercise A(並べかえの問題)の答合わせ: 指名された生徒が黒板に答えを書き、それで教師が説明・確認。<br>Dictation 5 題: 教師の言う英文を書きとる。   | なるべく生徒たちから言わせる、正確に。<br>内容を思い出させる。<br>大きな声で正確に。<br>机間巡視を行う。<br>板書中に机間巡視を行ってノートチェック。<br>書く時間を十分に。  |
| 3<br>新<br>出<br>事<br>項<br>の<br>導<br>入<br>と<br>練<br>習 | (1) 新しい文法事項の導入<br>(2) 応用練習(口頭)<br>(3) 新出語句の導入と練習<br>(4) 本文の聞きとり<br>(5) 本文の音読練習<br>(6) 本文の理解 | ①板書 { I have to study English every day.<br>Mike has to study French very hard.<br>2文の意味を確認し、教師のあとについて音読する。<br>②口頭練習: 黒板の文字を少しずつ消しながらClassで何度も読む; 消し終わった時点ではおぼえてしまっている; 全体→個人で暗唱。<br>① Pattern Practice : おぼえた文を基本にして、主語の置きかえ、to以下の置きかえ練習を行う。<br>② Picture Cards で練習: Tが主語のキューを出し、Class全体で絵を見てそれに合った英文を作って言う。時々、個々の生徒が言う。<br>フラッシュ・カード使用: a few, be については例文で使い方を確認する。<br>教科書を閉じ、Picture Cardを見てテープを聞く。<br>①教師のあとについて ②テープのあとについて読む。<br>③個人で練習 ④指名された生徒が読む。<br>① Outlining : 次の発問に指名された生徒が答える。<br>ア) 明男は何をしているのですか?<br>イ) 彼は、今どこにいるのですか?<br>ウ) いつ、だれと、ここにやって来たのですか?<br>エ) どうしてやって来たのでしょうか?<br>オ) 滞在予定は、どのくらいですか?<br>② 詳しい解釈と解説: 次のことについて確認する。<br>・ How do you do? を日本語で言うとは? ・ just a month ago の意味は? ・ work for~のforに注意<br>・ I have to study very hard and learn a lot about America. を日本語に直すと? ・ I want to be your friend and enjoy life here. を直すと? | 生徒がノートする時間を十分に与える。<br>have to, has toの発音に注意する。<br>すらすらと言えるように。<br>意味のある英文を作る。時々個人にあてる。<br>車を洗う絵、勉強している絵、朝起きる絵、手紙を書く絵などを示す。<br>英語・日本語を見せ何回も行う。<br>絵と音に集中させる。<br>大きな声で正確に。<br>机間巡視を行う。<br>本文の概要をつかませる。発問してから指名するまでの時間を十分にとる。<br>父親の転勤が理由であることに気づかせる。<br>How do you do? はすでに教えたので復習。<br>forに印をつけさせる。<br>日本語に直す2つの文に印をつけさせる。自然な日本語訳を与える。 |
| 4   | 宿題の指示   | Lesson 6, Part 2の復習   | 単語・音読の徹底確認。  |
| 5   | あいさつ  | T: Good-by, class. C: Good-by, Mr. M.   | 大きな声で行う。   |

指摘するようにしていたが、週3時間体制になって以来、ほとんどの場合、ホームルーム担任の先生に渡して、STなどで返却してもらうことにしている。「授業→復習→小テスト→小テストの反省」というサイクルの最後のところが欠けることになったが、逆に、クラス担任から返してもらうということで、生徒たちには別の意味での「外的動機づけ」となる一方、生徒たちの平常の学習状態をクラス担任に間接的に伝えることにもなる。「めんどろというよりは、むしろありがたい」という言葉を担任の先生からいただいたこともある。

さて、筆者の場合、小テストは「前時の復習」の最終段階で実施している。授業の冒頭で行わないのは、テストのためのテストとならないよう、前時の学習内容を今一度、読んだり、書いたりして復習した後で、確認のためのチェックテストを行うという形で実施しているからである。しかも、たいていの場合、小テスト実施の直前には、各自で新しく習った単語のつづりを最終チェックさせるなど、テスト前の再々学習時間を設定することにしている。要領のよい生徒ならば、この時間を含めての「前時の復習」で、家庭学習をなまけた場合でも小テスト勉強が十分にできてしまうかも知れない。筆者はそれでもよいと考えている。小テストはあくまでも復習の一部であって、「テストされている」という印象を生徒には与えたくないからである。小テストの外的動機づけの性格を少しでも内的なものにしたい、という願いがここに込められている。

中2段階で筆者が行う小テストは、次の3つのタイプに分けられる。

#### ① Dictation

前時学習内容を書き取らせる小テストであるが、教科書本文の中から重要事項を含む英文を5つほど選ぶか、あるいは、応用の意味で多少語句をかえたり、まったく新しい英文を考えたりして出題する。中2程度ではそれほど長い文は出てこないの、たいていの場合、教師が英文をノーマルスピードで7~8回くり返して言っている間に、生徒は小テスト用紙にその英文を書き取る、という要領で実施する。5題終わった後で、念のためということで、もう一度5つの英文をくり返してやる。採点は、1つの英文が完全に書けていれば2点、計10点満点としている。

#### ② Question & Answer

普通行われる手法は、教師がQを発し、生徒はその答えを書く、というものである。筆者の場合、この手法に従うことはまれで、まず、Dictationと同じ要領でQを書き取らせ、同時にその答えを自分で考えて書かせる、というやり方で実施する。この

場合、前時の本文に関係したPicture Card(s)を前方黒板上に示しておく。これは、単に、語法面だけでなく、本文の内容に関する復習もしてあるかどうかを同時にチェックできるので、筆者が愛用している手法である。この場合、Qは3題出すことが多く、Qの書き取りと答えを合わせて3点配点の計9点にしている。

#### ③ 英作文

日本語を板書してその日本語に相当する英文を書かせる、というごく普通のテストである。普通5題(10点)、むずかしい場合3題(9点)という出題をしている。問題は、本文中の重要な英文を自然な日本語に直したものを出题する場合、それに加えて、まとめに用いた英文、口頭練習の時に作った英文を素材にした場合とに分かれる。たいていは、この応用英作文を含めて実施する。

以上の3つのタイプに加えて、例えば、不規則動詞の語形変化を出題するもの、課全体の単語・連語をテストするものなどを実施したが、回数はわずかである。なお、単語の小テストを実施する場合は、教師が単語を発音し、生徒はそのつづりを意味とともに書く、という要領で行う。

## 6 新出事項の導入と口頭練習

生徒たちの学習意欲を考えた場合、「わかりやすい授業」を行うように心がけなくてはならない。1授業時間で教科書のワンパートを消化するという、ごく普通の授業では、この「わかりやすさ」は、そのパートで扱われている新出事項の導入と応用練習、そして、本文の内容理解の2つに、大きなポイントがあると考えられる。

筆者の場合、[資料-1]の学習指導案に見られるように、本文の理解に先行して、そのパートの新しい文法・文型事項を導入し練習する。この場合に心がけていることは、既習事項を最大限に生かしながら、理解しやすい状況設定なり例文なりを考えて、新しい項目へと導いてゆくということ、口頭練習を多く行うこと、そして、この際に、生徒たちの持っている既習事項からの応用・類推力を重視するということである。

例えば、「過去進行形」の導入では、次のような教師の発問から始まった。

- |                |   |
|----------------|---|
| T              | What time did you go to bed last night, S <sub>1</sub> ?  |
| S <sub>1</sub> | I went to bed at ten.   |
| T              | I see. (クラスに向かって) S <sub>1</sub> went to bed at ten last night. So he was sleeping at eleven o'clock. He was sleeping at eleven. Class! |
| C              | He was sleeping at eleven.  |
| T              | (sleepingのカードを示す。何も言わない)  |

- C sleeping  
 T sleeping!  
 C sleeping  
 T (カードを裏にかえて sleep にする) Class!  
 C sleep  
 T sleep!  
 C sleep  
 T S<sub>1</sub> was sleeping at eleven last night. Class!  
 C S<sub>1</sub> was sleeping at eleven last night.  
 T Were you sleeping at eleven last night, S<sub>2</sub>?  
 S<sub>2</sub> No.  
 T What were you doing at eleven last night?  
 S<sub>2</sub> I watching television.  
 T Oh, you were watching television. (クラスに向って) S<sub>2</sub> was watching television at eleven last night. Class!  
 C S<sub>2</sub> was watching television at eleven last night.  
 T What were you doing at eleven last night, S<sub>2</sub>?  
 S<sub>2</sub> I was watching television.  
 T I see. What were you doing at that time, S<sub>3</sub>?  
 S<sub>3</sub> I was studying.

この後、文型練習用の小さな Picture Cards で応用練習をする。普通、この次に「パートのまとめ」を板書するが、この場合は〔資料-2〕に示すような、Model Dialogue と例文を印刷したプリントを配布した。

この授業では、就寝時間をたずねることによって、その1時間後には眠っていたという状況を引き出し、過去進行形を導入している。sleep は新出単語だが、すでに中1で sleepy という単語を学習しているので類推できると考えて意味の説明はしていない。発音についても、教師側からは何も言わずにフラッシュ・カードを見せて発音させている。同じ時刻に他の生徒が何をしていたかを発問することによって、現在進行形の学習で得た「動作の継続」についての語感を生徒たちが自ら働かせて意味を理解できることを期待している。「be 動詞+~ing」の型にはすでに慣れているため、was, were についての学習が済んでいる段階では、くどくど説明する必要はまったくない。要は、新しい型に慣れさせることである。そこで、同じような発問とその答えを素材にして、文型練習をするとともに、Picture Cards を示して、応用の練習もしている。

まとめとして用いたプリントには、同じような状況設定の下で、2人が対話をしている英文を考えて与えるとともに、文法的なまとめ、さらに応用発展的な言いまわしを考えて与えることにした。これらの例文を十分に音読練習し、意味を確認した上で、対話文を暗唱してくるという宿題を出した。

〔資料-2〕 過去進行形の学習で用いたプリント

Supplementary Lesson (1)

- A : We went to Kyoto last Sunday.  
 B : What time did you start?  
 A : At seven.  
 B : Really? I was sleeping at that time.  
 A : We came home at eight.  
 B : I was watching a baseball game on television at that time.  
 Did you have a good time in Kyoto?  
 A : Yes, we did.

○過去進行形

{ was  
 were } + ...ing

○例文

- 1 What were you doing at that time?  
 I was studying.
- 2 Were you studying English or mathematics?  
 I was studying English then.
- 3 Was Mike studying, too?  
 No, he wasn't.  
 He was listening to records.
- 4 Where were Ken and Kumi playing badminton?  
 They were playing badminton at school.
- 5 Who was playing the piano?  
 Midori was.

「Will you ~?」の導入では、まず、ある生徒に向って、既習の命令文を組み合わせながら、次のように動作をうながした。

T : Stand up, S<sub>1</sub>. Please come here. Open the window, please. Yes. Will you open the window?  
 Thank you. Go back. Sit down.

次の生徒には、同様にして窓を閉じさせた。こうして状況を理解させた後で、

Will you open the window ?

の目標文を口頭練習し、おぼえさせてしまう。その時点で「~していませんか」という日本文を口頭で提示し、応用練習として Picture Cards を用いて Will you ~? を口頭で練習し、最後に、

Open the window.

Please open the window.

Will you open the window ?

Will you please open the window ?  
 の4文を板書して、相手の動作をうながす言い方をまとめたのである。

〔資料-1〕の「have to~, has to~」の導入では、最初からまとめ用の例文を板書し、この例文の意味を説明した後で、例文を暗唱してしまうまで口頭練習し、この時点までに板書事項をすべて消し、Substitution Drillができるようにもってゆき、そして、さらに、Picture Cardsを用いて、応用の口頭練習を行った。

以上に述べたようなことは、ごく普通に教室で行われていることであろうが、学習する文法・文型事項に応じて導入の仕方を考え、工夫していることを示そうとしたにすぎない。生徒たちは、「今日はどのように新しいことがらが提示されるだろうか」という、ある種の期待感を持って教師を注目してくれる。いつも同じ手法を用いていたのでは、生徒の側のこのような興味を殺してしまうことになるし、もっと危険なことは、文法・文型事項そのものの定着をうまくはかれなくなってしまうのである。新しい文法・文型事項の正しい理解のためには、その事項の構造的な把握が不可欠であるし、それを初めて学習する時の過程がきわめて重要だからである。とにかく、教師が自らの頭で、教えようとする項目の性質、発展性、実用性、既習事項との関連、生徒の実態等々を考え合わせて、一番よいと思われる導入方法を決定すべきである。

## 7 「まとめプリント」の利用

中学二年になると、現在・過去・未来の区別、不定詞・動名詞の基本的な用法、受動態など重要な文法事項が数多く出てくる。こうした項目の中から、特にまとめて練習しておく必要があると考えられることがらについては、「まとめプリント」を自作して、その項目の学習が教科書に出てくる直前に使用した。58年度に自作した「まとめプリント」は、次の8種類であった。

- No. 1 形容詞の比較変化
- No. 2 過去形：be 動詞
- No. 3 過去形：規則動詞
- No. 4 過去形：不規則動詞
- No. 5 未来時制：be going to~
- No. 6 受け身形（受動態）
- No. 7 受け身（その2）
- No. 8 助動詞

これらのプリントの形式は、ほぼ一定していて、

- I 例文
- II 文法的な解説・まとめ
- III 絵を用いた基本的な練習問題
- IV 発展問題

の構成で作成した。一例として、No. 6「受動態」のプリントを〔資料-3〕に示しておく。

「まとめプリント」を用いた授業は、すでに述べたように、その文法項目が教科書に出てくる直前に設定した。そうすることによって、その後パート毎に出てくることがらをまず全体的に学習しておくことができるし、教科書を用いた学習では、本文の内容理解に重点を置いた授業ができるのである。もちろん、文法事項については、教科書の本文や練習問題で確認と復習ができる。中学二年生くらいになると、ものごとの規則性や論理性に関心が向くようになるので、比較的学习意欲の高い生徒たちは、この「まとめプリント」が気に入ったようであった。

さて、授業は、No. 6のプリントを用いた場合、次のように進化した。

### 1. 受動態の導入

Mother makes a cake. を板書し、意味を確認した上で、

A cake is made by Mother.

と板書し、この時間に習う目標文を示す。同時に、受動態についての基本的な考え方を説明する。（「作られる」方のケーキを主語にして表現する）

### 2. 目標文の口頭練習と Substitution Drill による Pattern Practice

|              |         |         |           |
|--------------|---------|---------|-----------|
| Breakfast    | is      | made by | Mother    |
| Sandwiches   | are     |         | Father    |
| This table   | was     |         | my sister |
| Those chairs | were    |         | Jane      |
|              | will be |         | his uncle |

### 3. Picture Cards を用いた応用練習

### 4. 疑問変形と Yes, No の答えの練習

### 5. プリント配布

I, II, IIIの順で行い、IVを宿題とする。

中学二年の段階なので、たとえ文法項目をまとめた形で学習する場合であっても、このように、まず目標文を言い慣れること、置きかえ練習をしながら新しい項目を含んだ英文が速く言えるようになること、既習のことがら（この場合は、be 動詞の形と疑問変形・答え）を自然な形で組み込んで、自ら規則を作り上げるような手順で学習すること（つまり、帰納的な文法学習）をたいせつにしている。口頭練習を十分に行った後でプリントを配布するのは、こうした原則を踏まえているからである。

なお、この受動態の学習では、中二では扱わない未来時制も含めたが、これは、be 動詞に関する既習事項を応用できればと考えたこと、最初の段階で全体像

〔資料-3〕 「まとめプリント」の一例

まとめプリント No.6 : 受け身形 (受動態)

I.

a)

|     |        |         |            |
|-----|--------|---------|------------|
| 能動態 | Mother | makes   | a cake.    |
| 受動態 | A cake | is made | by Mother. |

cf. make-made-made  
wash-washed-washed  
eat-ate-eaten  
clean-cleaned-cleaned

b)

|      |        |         |                 |
|------|--------|---------|-----------------|
| 現在時制 | A cake | is      | made by Mother. |
| 過去時制 |        | was     |                 |
| 未来時制 |        | will be |                 |

c)

|     |           |           |                |   |
|-----|-----------|-----------|----------------|---|
| 肯定文 | This cake | was       | made yesterday | . |
| 否定文 | This cake | wasn't    |                | . |
| 疑問文 | Was       | this cake |                | ? |

II.

- a) 受動態とは? ——— 「be動詞+過去分詞」の形で「～が――される」という意味を示す。これまでに習った英文はすべて「～が(は)――する(である)」という文(能動態)でしたが、これらの文のうちで「目的語」のある文の「主語」と「目的語」の立場を逆にして表現するのが受動態です。
- b) 受動態の文における時制 ——— 「be動詞」が必ず使われるので、「be動詞」の形で時制を示す。
- c) 否定文・疑問文 ——— 「be動詞」の後ろにnotを入れて否定文、「be動詞」を主語の前に出して疑問文を作る。ただし、「未来時制」ではwillが使われるので、will notで否定文、willを主語の前に出して疑問文を作ることになる。

III. 絵を見て受動態の文を現在時制で作りなさい。

- ① My car is \_\_\_\_\_ by Mike.
- ② Your lunch \_\_\_\_\_ by Tom.
- ③ Dishes \_\_\_\_\_ Jane.
- ④ This room \_\_\_\_\_ my sister.
- ⑤ The boxes \_\_\_\_\_ Bob.



IV. 上で完成した英文を指示に従って書きかえなさい。

- ① (未来の文に)
- ② (過去の文に)
- ③ (疑問文に: それにYesで答える)
- ④ (過去の否定文に)
- ⑤ (未来の疑問文に: それにNoで答える)



を得させておいた方が将来への発展の基礎作りができると判断したためである。もちろん、教科書には出てこないで、その後の学習では未来時制の受動態は扱わなかった。学習意欲の高い生徒は教科書に出てくるかどうかなどあまり気にかけないので、こうした扱い方に満足するようであった。

「まとめプリント」は以上に述べた8種類であったが、三学期の学年末テスト後には、「総まとめプリント」のシリーズとして、日本語版1枚、英語版3枚のプリントを作成して、二年生の英語学習の仕上げをした。日本語版は、二年で学習したことがらについて45項目に整理し、空所を適語（日本語または英語）でうめるという形式のプリントで、基本的なものである。英語版総まとめプリントの方は、中1のしめくくりの学習の時にも用いた形式で、中1の時には、すべての英文にbookを含むように工夫して、1枚目のプリントで重要文を英作し、2枚目でその解答とともに書きかえの指示を示し、3枚目でその書きかえ問題の答えを示すという具合に、順を追って学習できるようにした。中2の場合は、必ずcakeという単語を含むように工夫し、同様に3枚のプリントを作成して実施した（1枚目は日本語を与えた並べかえ問題とした）。

## 8 新出語句・本文の導入と練習

新しく出てくる単語・連語は必ずフラッシュ・カードを作り、指導することになっている。フラッシュ・カードはごく普通に使われるものであるが、筆者の場合は次のようにして作る。まず、ワラ半紙を3分の1にカットする。これに黒のマジックインキで英語と日本語を大きく書く。同じ大きさに切っておいた厚紙を台紙にして、表と裏が上下逆になるようにセロテープで貼り合わせて出来上る。

このカードを使うのは、初めて学習する段階と、次の復習時の2回である。最初は、まず新しい単語・連語を必要に応じて例文とともに口頭で示しながら、カードを見せる。そして発音練習を2、3度行いながら裏返して日本語の方を見せる。一通り終わったところで、英語→日本語の順にカードを示し、教師のあとについて英語を発音する。これが一通り終わったところで、まず英語を見ながら、次に日本語の方を見ながら、生徒だけで発音練習をさせる。生徒たちの発音がよくない時や反応が遅い時には、その単語をくり返して練習させる。これが普通の手順である。こうして生徒たちは、1つの単語につき、少なくとも8回位は発音したことになり、7～8割の生徒は、その単語を目で見ても発音ができるまでになっている。

2回目の復習段階では、単語により、連語により、日本語の方を見せたり、英語の方を見せたりして、生

徒たちに発音させる。連語やそのパートの重要文に関係している単語の場合は、日本語を与えて簡単な口頭英作文も行う。生徒の反応に応じて、教師側からの発音練習の回数を調節する。これが一通り終わると、まず英語を見ながら、次に日本語を見ながら、生徒たちだけで発音させる。さらに、時間の余裕がある時には（二学期以降は、なるべくこの時間をとるように心がけたが）、黒板に日本語の方が見えるようにカードを置き、ノートに一度ずつ書かせた。この作業まで入れると4分程度の時間が必要であるが、口頭のみであれば2～3分で十分であった。

このように、フラッシュ・カードによる新出語句の練習のために時間をさいたのは、二年生ともなると、各パート毎に出てくる単語の数が増え、そのことが原因で意欲を失う生徒がいるからである。このようにして授業中に十分な練習をさせておくと、単語アレルギーを防げる一方、その後の授業展開（本文の音読や意味の理解）がスムーズにゆくし、小テストの出来具合にも反映されるのである。基本をしっかりとおさえることによって、全体のレベルを維持し、意欲喪失を防ごうというわけである。

新出単語の導入・練習につづき、本文の提示を行う。たいていの場合、Picture Cardを用いてOral Introductionを行った後、そのカードを示しながら、テープを用いてまず耳で聞かせる。次に教科書を開いて、教師のあとについて音読練習を行う。この練習は、すでに新出語句の発音練習が十分に行われているので、かなりスムーズに実施できる。従って、区切りやイントネーションに注意させながら、まずsence groupに分けてrepeatさせ、次に、大きな区切りにしてrepeatさせる。次に、テープのあとについて練習させ、さらに、個人読みの練習を行わせる。「各自で1回ずつ！」とか「3回くり返して！」とか、その時々に応じて最低読む回数を指示して行う。そして最後に2～3名の生徒を指名して個人読みさせる。こうして、クラス全体としては、少ない時でも4回ほどは本文を音読している。

本文の音読練習は、家庭学習でくり返し行われるべきものである。その成果を次の復習時に自己評価できるようにしてやりたい。それが、低レベルではあるが、学習意欲を持続させるのに効果がある。筆者の場合、復習時の単語・連語の練習に続き、再びPicture Cardを示しながらテープで本文を聞かせ、その後で、教師のあとにつき、さらにテープのあとについて本文の音読練習を行う。この後、必ず個人指名を行い、一人で、あるいはペアーを組んで、本文を読ませる。教室のすべての生徒に個人読みを指名できるようにと、メモ代りのノートにチェックしている。その結果、58

年度は、年間を通して一人平均5回ほどは、この個人読みの指示を受けた。中1の頃より、語句の発音練習や本文の音読練習をくり返し、くり返し行っている。読むことに関しては、かなり良い成績をあげられるものと思っている。

それでも悩みはある。徐々に Choral Reading 際の音量が小さくなってきていることである。クラスの雰囲気にもよるが、A・B両クラスの内、特にB組では二年生になってから、クラス全体で口頭練習をしたり、音読したりする時の声が小さくなってきている。折にふれて、机間巡視する際に、声の小さい生徒に注意するものの、なかなか効果があがらない。声がそろわないことは気にならないし、それほど問題ではないと思っているが、どうも声の小さいことは気になるので、三年生では、さらに悩まされそうである。

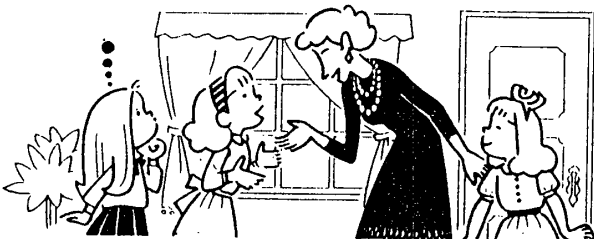
## 9 本文の理解

本文の音読練習が終了した次の段階で、本文の意味の確認に移るが、必ず、まず全体のアウトラインをつかみ、その後で、個々の意味を明らかにするという手順で行っている。また、日本語に直す作業は極力避けるようにし、どうしてもという英文のみを日本語にするが、その際も「日本語でいうとどういう意味ですか?」と問いかけて、いわゆる訳出するということを強制せずに、意味内容がわかっているかどうかをチェックし、その後で教師の日本語訳を与えるようにしている。

筆者が本文全体の Outlining としてよく用いる手法は、教科書に必ずといってよいほど載っている「さし絵」や「写真」を利用することである。例えば“New Horizon English Course 2”の Lesson 12, Part 1 では、

- [資料-4] のような「さし絵」が本文の下に載っていた。そこで、この「さし絵」について
- ① この話に出てくる Mary っていう女の子は、この絵のどこにいますか?
  - ② ここは一体どこでしょうか?
  - ③ 真中のあたりに立っている女の人は、だれでしょうか?
  - ④ そのお母さんに向かって、別の女の子が何か言っ

[資料-4] Lesson 12, Part 1 のさし絵



ているようですね。どんなことを言ったのでしょうか? 英語でいうと?

- ⑤ その女の子に答えて、お母さんが何か言っています。何て言ったのでしょうか?

という具合に発問する。この問いに答えれば、ほぼ本文の内容が理解できたと言えるので、本文の詳しい解説については、ポイントとなっている受動態の過去形の文や、接続詞 before の使い方などに注目させて、確認したり、日本語に直して終わることができる。従って、本文の意味内容の理解のためには10分もいらないほどで、時には5分位で終わることさえある。

「さし絵」「写真」を用いない場合には、あらすじをつかむ上でのポイントを設定して、日本語または英語で発問する。(〔資料-1〕学習指導案 参照)

なお、家庭で学習する時に的をしぼりやすくするために、本文中で日本語に直す作業をした文については、印をつけさせている。意欲の少ない生徒も、こうして指示されると、その英文をおぼえようとする気持ちが少しでも出てくるようである。

## 10 自由英作文

これまでのところで、平常の授業の様子を報告した。基本的なことがらをしっかりとおさえ、すべての生徒が理解し、運用力を養えるようにと、1つ1つの練習に十分な時間をかけることを心がけている。前の段階での十分な学習が次の段階での学習を容易にし、確実なものとする、という原則を堅持しているのである。こうした配慮は、とりわけ学習意欲が低下しがちな生徒、先述の3つのタイプで言えば、最後の生徒および中間タイプの生徒に対するものといえる。意欲ある生徒にも、個々の練習で退屈しないようにと気をつけてはいるが、やはり、こうしたレベルの高い生徒たちの興味・関心をさらに高めてやったり、また、応用力や高度な運用力を付けてやるためには、別の刺激や活動が必要であると考ええる。

自由英作文の課題は、こうした意図をこめて実施された。教科書の練習問題になっていたものもあるが、二年生の1年間を通して、合計4回の機会を与えた。

二年生になって最初の授業では、一年生での学習内容を総合的に活用するという意味も込めて、“Introducing Your Friend”という言語活動を設定した。席の隣合った2人のペアで、相手に名前や年齢、家族、住所など一年生で学習した文型を用いて質問し合い、相手の答えをメモし、それをさらに、新聞記者のレポーターになったつもりで英作文してまとめあげる、という課題を与えたのである。これが、第1回目の自由英作文となった。

2回目は、Lesson 1 終了時に、練習問題の指示通り

に、自分および家族の紹介文を、Lesson 1 で習った内容をどんどん取り入れてレポート1枚程度に書きあげる、という課題を与えた。

次に、夏休み明けの最初の授業で、“Let’s Talk about the Summer Vacation”という言語活動を設定した。一学期の重大なポイントは過去形の学習であった。これを総合的に活用できることをねらって、夏休み中にどんな生活をしたのかを、まず、教師が用意したいくつかの質問に答える形で話させた。これをモデルにして、隣の生徒どうしで話させた。この話をもとに、“My Summer Vacation”という題でレポートさせたのが、3回目の自由英作文となった。

4回目は、同様にして、冬休み終了後の三学期最初の授業で、“Let’s Talk about the Winter Vacation”として行ったことをもとにして、“My Winter Vacation”というレポートを課したのである。冬休み中には、クリスマス、大みそか、正月と年中行事が続き、とりわけ日本の伝統的な文化が生活の中に出てくる時期なので、日本の文化を英語で語るという活動にもなり、文化にまわりつき単語さえ教えてやれば、楽しく会話ができ、また、レポートもできる。

以上4回の自由英作文は、提出後早くて1週間、遅い場合は3週間後位をめどに、教師が添削して生徒たちに返却した。生徒に返すまでに、すぐれた作品を1クラス4～5点を選び、教師が添削した英文をタイプして、作品集のプリントを作った。これを書いた本人に読ませて、教師から簡単なコメントを加えるという形で、授業の15分程度を用いて行った。4回にわたるプリントでは同じ生徒の作品がくり返されることのないように配慮したが、どうしても各クラス1～2名の者は作品が2度載ってしまった。また、1回目、2回目の自由英作文はまだ二年生になりたての頃であり、初めて自分でまとまりのある英文を作るということでもあったので、生徒の書いた作品は、量も少なく、内容的にもつまらないものが多かった。それが3回目、4回目となるにつれて、量も多くなり、面白い内容を書けるようになった。よい作品をプリントにしたことが刺激となり、また、次の英作文へのヒントにもなったようである。

自由英作文の作品をどのように評価するかは、教師の考え方によって違ってこようが、筆者の場合は、英語面と内容面に同じ比重を置くようにしたが、いくぶん内容重視に傾いていたかと思う。評価はA・B・C・Dの4段階またはEまでの5段階（第4回のみ）とし、小テストなどの平常点の中に加えた。自由英作文の4回の評価でAの評価を1度でも受けた生徒の数と、その生徒たちの学年末の評定を表にしたものが、[資料-5]である。これを見てわかるように、

〔資料-5〕 Aの評価を受けた生徒の学年評定

| Aの評価回数 | 生徒の数 | 学年評定* | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 |
|--------|------|-------|----|---|---|---|---|---|---|---|
| 4回     | 6名   |       | 6  |   |   |   |   |   |   |   |
| 3      | 3    |       | 3  |   |   |   |   |   |   |   |
| 2      | 5    |       | 1  | 2 | 1 |   |   | 1 |   |   |
| 1      | 12   |       |    | 2 | 5 | 2 | 2 |   | 1 |   |

※注：生徒に渡す通知表では、10段階の絶対評価で行っている。

Aの評価を4回または3回受けた生徒はすべて学年評定が「10」の者ばかりであった。学習意欲の高い生徒たちが、この自由英作文に刺激されたことは確実に言える。一方、Aの評価を受けた生徒の中には、学年評定が「5」の生徒が1人、「4」の生徒が1人含まれている。これは、英語の学力としては低いけれども、自由英作文を通して自己表現しようという動機づけを得、積極的にレポート作りに取り組んだ結果と思われる。この「5」の生徒が第4回目に書いた作品を、添削前のオリジナルで示しておくことにする〔資料-6〕。つづりのミス、語法上の誤り、punctuationなど、すべて原文のままであるが、彼女の「伝えたい」「表現したい」という気持が伝わってくる。

〔資料-6〕 自由英作文の作品例（女子生徒 A. M.）

#### “My winter vacation”

Our winter vacation is from December 21 to January 8.

I played with my friend on December 23.

I usually got up at about six forty-five and went to bed about eleven. But winter vacation got up at nine thirty or ten and went to bed twelve or one o'clock.

We were made rice cake on December 30.

Sitting up late at night isn't good for the health. But, it was New Year's Eve. I watched “Year-End singer's Festival” on TV, and then listened to the radio.

We ate zoni, and New Year's dishes, and then we look at our New Year's cards. Then my parents had ten thousand a New Year's present.

We went to grandmother's house by car on January, 2 and we reached grandmother house. “A HAPPY NEW YEAR!” I said. Then grandmother had five thousand New Year's present.

I have to do my homework. I have to finish by January 8.

I'm tired out with difficult homework……!

The short winter vacation is over.

## 11 放送劇風グループ発表

“New Horizon 2”の Lesson 10 は、『トム・ソーヤの冒険』より、ペンキ塗りを命じられたトムがポリーおばさんの目を盗んで、まんまと町の少年たちにペンキ塗りをやらせてしまうという題材を、劇のシナリオ風にアレンジした課であった。練習問題には「みんなで役割を分担して、この劇をやってみましょう」という指示があるのだが、とても劇まではできないと判断し、放送劇風に読み合わせを行うことにした。それまでの音読練習の成果をみってみるという意味もこめられた。

語り手を含めて7人の配役なので、各クラス42名の生徒を6つのグループに分け、Lesson 10 終了後に、30分程のグループ活動を行わせ、次の授業1時間を使って発表会を催した。発表に際しては、審査用紙を用意し、各グループの発表について、声の大きさ、発音のうまさ、感情の込め方、グループの協力、全体の印象の5つの項目に従って、5段階で評価させた。6つのグループの発表とそれぞれの発表の審査が終了した後で、教師がうまいと感じた生徒を1役1人ずつ指名して、ベストメンバーでも行わせてみた。また、グループ発表の際には、教卓にテープレコーダーを置いて録音できるようにし、緊張感を作り出すとともに、別のクラスでも発表の様子を聞けるようにした。

この試みは、どちらかと言えば息ぬき程度の活動と考えて行ったのだが、意外と生徒たちの関心呼び、昼放課や授業後にグループで練習する風景が見られた。発表中も熱心に友だちの朗読に耳を傾け、また、審査用紙を前に頭を悩ませている生徒が目立った。本文の音読練習の時には、教科書準拠テープの native speakers がとてもうまく吹き込んでいたので、いつもの筆者の指示「テープをまねて！」に従って、楽しそうに取り組んでいたが、その効果もみられ、実に感情をうまく込める生徒がたくさん出たりした。中には、「この子が！」と思えるほど、日頃の読み方とは数段も上手に読み、筆者はもちろん、級友の拍手を浴びる生徒も現われたのである。例えば、審査用紙の備考欄に、「特にうまいと感じた人はだれですか？ 3人まで書きなさい」と指示したが、これを集計した結果、最高25票、2位24票、3位21票となり、この21票を集めた生徒は学年評定(10段階)が「4」であった。

さらに驚いたことは、このグループ発表の5日後、秋の遠足の時に、親しい者が集まったグループの中で自由に配役を決めて暗唱し合っている光景が、電車の中やハイキング途中で見られた。結局、彼らは何度も朗読練習している内に、英文全体をおぼえてしまったのであった。日頃は、「この英文をおぼえてくること」と言うため息をもらす生徒たちなのであるが、こん

なふうにして、知らず知らずの内に英文をおぼえてしまうという楽しい体験をさせたのだということを、この遠足の時に初めて知って、われながら生徒たちの持っている力には脱帽したという次第である。紙面では、発表の時の様子や遠足の時の光景を十分に伝えられないので、残念である。

## 12 読み物教材の活用

長期休暇の折には必ずと言ってよいほど課題を出すのが、本校英語科である。夏休みには、市販のワークブックと Lesson 1~Lesson 7 のポイントをまとめた暗唱文プリント2枚を与えた。冬休みには、これも市販されている中学生用の読み物を与えてみた。

中2の段階では、教科書も次第に物語風のものが増えてくるので、細かいことにこだわらずに、英文で読み物を読む楽しさを味わおうという目的で教材を選んだ。選んだと言っても、中学生用の読み物教材はきわめて限られているし、ましてや、中2程度というのは、なかなか見つからない。どれをとっても、未習事項がかなり出てくる。そんな中で、名英図書の“Junior Reading Book 1”は、比較的満足できた。13の短い話が「さし絵」、「新出語句」、「練習問題」とともに与えられているものである。この話を1日1話ずつ30分程度でよいかから読むことを課題としたのである(冬休みの課題としては、教科書 Lesson 11 までの単語・連語を復習する課題も与えた)。三学期の授業でこの読み物を扱うので、休み中は、くれぐれも楽しんで読むことに心がけ、細かい点にはこだわらないことを強調した。

学力が中位以上でないとむずかしいであろうという予想があらかじめあったし、未習事項もあったので、三学期に入ってから、先に述べた“Let's Talk about the Winter Vacation”の授業を1時間行い、2回目の授業から合計6回の授業で読み物を扱った。授業は、物語のあらすじをたどることを主眼とし、日本語に直す作業は一切行わなかった。学習意欲の高い生徒の中には、細かい点にこだわる者もいるし、せっかく出てきたので教えておいてもよいと考えられた文法・句型事項を15項目にまとめ、ノートに整理させた。

なお、冬休みの課題テストは、この授業完了後1週間たった時に、単語・連語の課題テストとともに行った。読み物に関しては、15項目のまとめと13の話の内の7つにしばって出題範囲とした。このテストは、思ったよりもよい結果が得られた。

## 13 ビデオの利用

日本の英語教育では、これまでテープレコーダーや

L.L., O.H.P. などが視聴覚機器の主役であったが、最近、ビデオ機器が新しい分野として注目されている。もっとも、NHK でテレビの英語番組が始まったのは昭和 32 年のことなので、テレビと英語教育の歴史は古いとも言える。筆者も、英語教育の場にビデオを活用できないかと、遅まきながらこの方面の研究に手をつけたばかりである。とりあえず、NHK テレビの中・高校生向けの英語番組を録画しておいて使える時に使ってみようと、いわゆる「カンヅメ的」利用から始めた。

この番組を利用して授業に初めてビデオを用いたのは、58 年度の中 2 が一年生の時、それも学年末の 2 月下旬であった。NHK 教育テレビの中学生向け番組（“Look and Learn”）で「How many～？」の項目を扱っているものを編集して、スキットの部分と応用練習の部分を授業に利用したのである。

こうして生徒たちにビデオ番組による学習を体験させた後、一年生学年末テストにおいて、毎回定期テストで出題していた「テープによる問題」を「ビデオによる問題」とし、部分ディクテーションの問題をビデオで出題したのである。これは、スキットの会話部分を 5 回くり返すように編集したものをテスト時間に見せ、生徒たちはその間に空所になっている部分に適する語句を書き入れる、という形式で実施した。こうしたタイプの問題を“Video Quiz”と呼び、二年生になってから、毎回、定期テストに取り入れた。生徒にとっては、テレビの画面を見ながらテスト用紙に書き込まなくてはならないので、オーディオテープで同じテストをした場合のように耳だけに集中できないという結果となったが、逆に、場面を目で見ながら聞くことになるので、音声のみのテストよりも話の筋をつかむにはよかったのではないと思われる。ただ、テストの時に初めて見聞きする会話なので、応用力を問われることになり、やや高度なテストとなったが、学習意欲の高い生徒たちは、この次はどんな“Video Quiz”が出題されるかと、興味を抱いていたようである。一方、教師としては、録画済みの英語番組の中から、その時点で学習している項目、あるいはそれに近い内容のものを選ばなくてはならないので、問題を作成するのに時間がかかったことが欠点としてあげられる。

二年生の教科書を用いた学習が完了した時点で、7 節で述べたようなプリントによるまとめ学習を実施したが、その直後の 2 時間を用いて、ビデオによる授業を行った。

生徒たちにアメリカ合衆国の首都ワシントンについて学習させてやりたい、また、すでに学習した受動態の復習もできたらよいと考え、NHK 教育テレビの番組

（“Let's Try”）より、ワシントン出身の女性がワシントンにある数々の名所案内をしている部分を編集して、ビデオによる授業を構想した。英語はとてもわかりやすい発音なので問題はなかったが、生徒にとっては、固有名詞やそれにまつわる数々の未習単語が聞きとる上での障害になると考えられた。そこで、番組を 3 つのパートに分け、それぞれについて半紙大のプリントを作成して、授業の際の補助教材とすることを考えた。こうして、まず、何の助けもなしに自分の力だけでビデオの内容を理解するという、程度の高い動機づけをし、その後で、プリントに従って徐々にわからない部分を減らしてゆく、という方法が可能となった。つまり、

- (1) テレビ視聴（1 回目）
- (2) プリント配布：新出単語の発音と意味の確認
- (3) テレビ視聴（2 回目）
- (4) ポイントのチェック
- (5) 英文の音読
- (6) テレビ視聴（3 回目）

という手順で授業を展開したのである。また、プリントにしておいたことで、見ただけに終わらず、さらに学習したい生徒は自宅で番組の内容を復習することができた。

## 14 学力不振の生徒に対する指導

3 節で述べたように、学力の低い生徒は学習意欲を失いがちである。学力が低くなっているのはなぜかを考えてみると、生徒の興味・関心、教材、授業過程という 3 つの要素が複雑にからみ合っているように思える。筆者も、学力不振の生徒たちをどのように指導したらよいのかと迷いながら、決定的なことはできない。しかし、こうした生徒たちを放っておくわけにはゆかない。彼らは、英語がわからない、だから興味を失う、すると授業がつまらなくなる。つまらなくなるから、授業に集中できず家庭学習を怠り、また英語の学力が低下する。こうした悪循環の中に置かれている場合、教師側から何らかの働きかけをしてやらないと、増々、抜け道を見出せずに泥沼に入り込んでゆくことになってしまう。

筆者が、通常の授業において、実に基本的なことをくり返しくり返し練習させることの最大のねらいは、すべての生徒に英語がわかり、英語の学力が少しずつでもよいから確実につくようにするということにある。小テストもそうである。なるべく少しの量を集中的に学習し、その積み重ねで確実な力を養いたいのである。小テストによって、この小さな積み重ねのステップ毎に、自己評価できるし、教師もそれまでの学習状態を把握できる。

学力の低い生徒は、この小テストでさえもなかなかよい成績をおさめることができずにいる。小テスト用紙に⊙マークをつけ、英語科研究室に來させる。そこで、ほんの数分ではあるが、小テストの内容に関する復習をしてやる。翌日、同じ内容を再テストとして実施する。記録がないので、だれが何回と示すことはできないが、一年生の時は頻りに再テストを実施したので、多い生徒は年に10回、20回と英語科研究室を訪れているだろう。筆者が彼らに要求することは、まず、「言えること」であり、次に「読めること」である。小テストは「書くこと」を通して実施しているが、その内容を「言える」、「読める」程度には必ず練習させる。「言える」、「読める」という自信を得させ、あとは、その勢いで家庭学習させるのである。幸いにして、名大附中には、「言えない」生徒はきわめてまれである。筆者が赴任して11年になるが、中1程度の英語が「言えない」生徒は1人もいなかったと記憶している。前任校では「言えない」生徒もいたので、このことは筆者たち英語科スタッフにとっては救いである。

再テストのシステムは、定期テストや休暇後の課題テストでは、ほとんど実行に移された。同一のテスト問題のこともあるが、たいていは別の問題を作成し、テストのために勉強するのではなく、英語の力をつけるために勉強するのだということを常に意識させる。学習意欲の低い生徒たちに「再テストを実施するから勉強してくること」と言っただけでは、効果のある学習は期待できない。何を、どのようなやり方で、どの程度やるのかという具体的な指示が欠かせない。時々、再テスト対象者を集めて、プリント学習を行い、その中から出題することを伝えて、再テスト当日までの家庭学習を細かく確認させたこともある。

二学期中間テスト後の指導について、少し詳しく述べてみよう。中間テスト後の最初の授業でテスト答案を返却した。テスト返却の時は、必ず1時間を用いて様々な角度から反省を行うが、この場合は、「英文を作る時の基本」をまとめた。テスト問題の書きかえ、並べかえ、英作文を例にしながら、主語と動詞がセットで出てくること、動詞の形を慎重に決定する必要があることなどを具体的に話し、また、考えさせた。

再テスト対象者は40点未満の者(16名)とし、昼休みに視聴覚教室に集めて、20分程再テストまでの10日間どのように学習するのかについて話をした。学習内容を2つにしぼった。1つは、中間テストの範囲であった教科書 Lesson 7~10の単語・連語をおぼえ直すこと、もう1つは、Target Sentencesを暗唱することであった。後者については、左半分に英文タイプで暗唱文を打ち出し、右半分に日本語で意味が書けるようにしたプリントを用意した。筆者は、9節で述

べたように、英文を日本語に直す作業を重視していないが、この生徒たちは日本語を与えてやると安心する傾向が強く、また、英文を棒暗記して意味を考えていないことがあるので、あえて日本語と英文を対比して学習できるようにした。16名の生徒は、このプリントに日本語で意味を書き込むと同時に、単語・連語を整理したノートを持って、英研へ来ることを指示された。ここでO. K.の出た生徒は、テストに向けて単語の勉強、重要文の暗唱を行ったのである。

再テストの結果は〔資料-7〕の通りであった。得点の低い者から順に並べてあるが、単語の得点が10点に満たない者が3名いることに注目していただきたい。このA, B, C3名の生徒は、総得点とその中に占める単語得点率が、それぞれ、33点(24%)、42点(17%)、45点(20%)であり、これらの数字も16名の中のワースト3であった。また、16名の中で、単語の得点率が配分率(43%)を上回る者が1人もいなかった。普通なら得点しやすいはずの単語・連語で点がとれないのである。筆者は、本校の生徒に関する限り、学力不振に陥っている生徒は大部分は「書けない」生徒であり、それは、語彙力がないことに端的に現われているという仮説を持っている。この再テストの結果は、この筆者の予測をほぼ立証しているように

〔資料-7〕 再テスト対象者の成績の動き

| 生徒 | ※1  |     |     | 再テスト | 内単語<br>得点(率)※2 | 2・末 |     |   | 学年評定 |
|----|-----|-----|-----|------|----------------|-----|-----|---|------|
|    | 1・中 | 1・末 | 2・中 |      |                | 学年末 | 学年末 |   |      |
| A  | 22点 | 13点 | 15点 | 33点  | 8点 (24%)       | 19点 | 22点 | 2 |      |
| B  | 30  | 31  | 31  | 42   | 7 (17)         | 35  | 39  | 3 |      |
| C  | 32  | 15  | 20  | 45   | 9 (20)         | 34  | 30  | 3 |      |
| D  | 23  | 21  | 23  | 45   | 12 (27)        | 20  | 36  | 2 |      |
| E  | 39  | 23  | 31  | 56   | 22 (39)        | 42  | 41  | 3 |      |
| F  | 49  | 46  | 29  | 57   | 14 (25)        | 37  | 54  | 5 |      |
| G  | 37  | 23  | 39  | 57   | 20 (35)        | 58  | 63  | 4 |      |
| H  | 44  | 26  | 36  | 60   | 25 (42)        | 31  | 48  | 4 |      |
| I  | 30  | 22  | 35  | 61   | 24 (39)        | 49  | 70  | 5 |      |
| J  | 49  | 44  | 36  | 61   | 18 (30)        | 35  | 60  | 5 |      |
| K  | 49  | 30  | 33  | 63   | 18 (29)        | 34  | 48  | 4 |      |
| L  | 41  | 40  | 37  | 74   | 24 (32)        | 47  | 53  | 4 |      |
| M  | 55  | 57  | 35  | 77   | 23 (30)        | 74  | 71  | 6 |      |
| N  | 51  | 49  | 33  | 87   | 36 (41)        | 41  | 60  | 4 |      |
| O  | 65  | 55  | 38  | 90   | 39 (43)        | 65  | 63  | 6 |      |
| P  | 61  | 35  | 27  | 95   | 41 (43)        | 70  | 78  | 6 |      |

〔注〕※1 「一学期中間テスト」以下同様。  
 ※2 再テストは100点満点の内、単語・連語を43点分出した。従って得点率は、満点をとった場合43%である。

〔資料-8〕 「英語学習についてのアンケート」結果（58年3月17日実施：回答者81名）

|  |  |
|--|--|
| 1 あなたは英語が好きですか、きらいですか？<br>大好き 好きなほう ふつう きらいなほう 大きらい<br>12% 40% 25% 20% 4%  | (4) 大きいピクチャー・カードを見ながら<br>テープを聞くこと [3.96]   |
| 2 英語の授業は、他の科目の授業にくらべてどうでしたか？<br>(1)とても楽しかった 楽しかった 同じ つまらなかつた とてもつまらなかつた<br>11% 47% 32% 10% 0%  | (5) 先生のあとについて本文を読むこと [4.32]<br>(6) テープのあとについて本文を読むこと [4.26]<br>(7) あてられて、本文を読むこと [3.69]<br>(8) 話のあらすじについて、日本語で答えること [3.86]<br>(9) 本文の意味を日本語で言うこと [3.96]<br>(10) 英語の質問に英語で答えること [3.96]<br>(11) まとめをノートに書くこと [4.46]<br>(12) 書きとりの小テスト [3.81]<br>(13) 英文文の小テスト [3.63]<br>(14) 質問を書きとり、答えを自分で書く小テスト [3.79]   |
| ○それはなぜですか？<br>・絵、カード、テープ、ビデオなどいろいろ使うから(8名)<br>・英語が好きだから ・興味があるから(7名)<br>・声を出して読んだり他の授業ではやらないことをやったから(4名)<br>・わかりやすい(4名) ・歌があった(3名)<br>・1時間がとても充実していたから(3名)<br>・英語がきらいだから(4名)<br>・他の科目の授業と同じような感じだから(2名)<br>・進み具合がはやかったから(2名) | 4 いつもの授業に加えて、次のような活動をしました。同様に、5段階で評価してください。<br>(1) 英語の歌(ドレミの歌、ホワイトクリスマス、ジングルベル、エーデルワイス) [4.14]<br>(2) まとめのプリントシリーズ [4.32]<br>(3) 英文レポートの作成 [3.17]<br>(4) その作品をプリントしたもの [3.35]<br>(5) ワークブックの家庭学習 [3.74]<br>(6) 夏休みのワークブック [3.70]<br>(7) オーストラリアのスライド [4.20]<br>(8) 放送劇風グループ発表 [3.79]<br>(9) 冬休みの読み物 [3.64]<br>(10) 発音記号のプリント学習 [3.98]<br>(11) 「総まとめプリント」の学習 [4.20]<br>(12) ビデオによる学習 [4.09] |
| (2)しっかり勉強できた 勉強できた ほう わからない あまり勉強しなかつた まったく勉強しなかつた<br>4% 51% 30% 15% 1%  | 5 英語の授業で「こんなことをやってほしい」、「あんなことをやってみたい」ということがあったら、いくつでもよいですから書いてください。<br>・ビデオを使う(8名)<br>・放送劇風グループ発表のような活動(8名)<br>・英語版のアニメを使ってほしい(4名)<br>・日常会話に役立つことを教えてほしい(3名)<br>・ゲストに外国人を呼んで話がしたい(3名)<br>・スライドを見る(3名)<br>・いろいろな国の暮らしについて知る(3名)<br>・英語の映画を見たい(2名)<br>・教科書以外の歌(2名)<br>・友だちどうして英語でおしゃべりをする(2名)<br>・絵本を翻訳する(1名)<br>・文型をやってほしかった(1名)  |
| ○それはなぜですか？*1<br>・宿題が他の科目と比較して多いから(4名)<br>・みんなが騒がずまじめに聞き集中できた(4名)<br>・勉強しないとわからなくなるから(3名)<br>・他の科目より勉強しやすい・おぼえやすい(3名)<br>・毎日の勉強をきちんとできなかつた(5名)<br>・他の科目と区別なくいっしょにしている(3名)<br>・英語しかできない・やることがない(2名)                            |  |
| 3 ふだんの授業で行ったことがらについてどう思いますか？次の5段階に従って数字で教えてください。<br>とてもよかつた よかつた どちらでもない よく なかつた まったくよくなかつた<br>5 4 3 2 1   |  |
| (1) 新しい単語・連語をフラッシュ・カードで練習すること [4.27] *2  |  |
| (2) 小さいピクチャー・カードで文型練習したこと [4.05]   |  |
| (3) 教科書を開く前に、先生が話の内容を簡単な英語で話したこと [3.86]  |  |

〔注〕\*1 (1)と重複するものを除いた

\*2 以下の数字は、評価を合計したものを回答者数で割った平均値

〔資料-9〕 学習意欲が増す時

〔資料-10〕 学習意欲が低下する時

- 1 テスト前 (18人)
- A (評価的理由) 2 テストで悪い点をとった時 (7)
- 3 小テストの前 (3)
- 4 テスト後 (2)
- 5 テストで点数がよかった時 (2)
- 6 受験などのことを考えた時 (1)
- 
- 1 やっている所がわかりやすい時 (8人)
- 2 宿題がたくさんある時 (6)
- 3 おもしろそうな内容の時 (5)
- B (内容的理由) 4 物語を読んで内容が理解できる時 (3)
- 5 わからない所が自分の力でわかった時 (2)
- 6 ビデオなど聞きとれない時 (2)
- 7 英語がわからない時 (2)
- 8 自分の答えが合っていた時 (1)
- 9 質問に答えられない時 (1)
- 10 授業中 (1)
- 11 英語の教科書を開いた時 (1)
- 12 授業のあった日 (1)
- 
- 1 英語の歌を聞いている時 (7人)
- C (実用的理由) 2 外国の映画・テレビ番組を見た時 (5)
- 3 海外旅行したいと思った時 (2)
- 4 外人を見た時 (2)
- 5 英語をペラペラと話す人を見た時 (1)
- 6 テレビなど英語が出てきて少しわかる時 (1)
- 7 英語のことばが出てきた時 (1)
- 
- 1 気がむいた時 (3人)
- 2 気分がよい時 (2)
- D (情意的理由) 3 やらなければと思った時 (2)
- 4 友だちに負けたくないと思った時 (1)
- 5 みんなより遅れていると思う時 (1)
- 6 窮地に追い込まれた時 (1)
- 7 日常、日本語がいやになった時 (1)
- 8 ふと考えついた時 (1)
- 
- E (身体的理由) 1 他にやることなく、ひまな時 (7人)
- 2 疲れていない時 (1)
- 3 眠たくない時 (1)
- 4 二、三時間目 (1)
- 5 夏休み中 (1)

- 1 テスト前 (5人)
- A 2 テストの点数が悪かった時 (5)
- 3 テスト後 (4)
- 4 小テストなどが全然できなかった時 (1)
- 
- 1 よくわからない時 (15人)
- 2 長い文を日本語に直す時・本文が長い時 (4)
- 3 たくさん宿題を出された時 (4)
- 4 内容がつまらない時 (3)
- 5 授業についていけなくなった時 (2)
- 6 教科書を読めない時 (2)
- 7 あまり簡単な問題をやる時 (2)
- B 8 宿題がない時 (2)
- 9 発音がわからない時 (1)
- 10 習った単語なのに違う意味の時 (1)
- 11 わからない単語がたくさん出る時 (1)
- 12 発音記号・ややこしい単語をおぼえる時 (1)
- 13 説明文の内容をやっている時 (1)
- 14 高度な問題集でわからなくなった時 (1)
- 15 夏休みの前など課題が多量にでる時 (1)
- 16 英語の授業のない日 (1)
- 
- C 1 何で英語をやるのかと思った時 (1人)
- 
- 1 授業が楽しくない感じになった時 (2人)
- 2 腹がたった日・むしゃくしゃした時 (2)
- 3 勉強しても成績が上がらない時 (1)
- D 4 始めようとした時親に文句を言われた時 (1)
- 5 叱られたあと (1)
- 6 何をやってももうまくいかない時 (1)
- 7 むしように運動がしたい時 (1)
- 8 やらなくてもわかると自信のある時 (1)
- 
- 1 眠い時 (6人)
- 2 疲れている時 (4)
- 3 忙しい時 (3)
- 4 腹の減っている時 (1)
- E 5 他のことに打ちこんでいる時 (1)
- 6 一時間目 (1)
- 7 六時間目 (1)
- 8 臨時授業の時 (1)



思われるが、いかがであろうか。〔資料-7〕には、再テスト前後の定期テストの得点と学年評定も合わせて一覧できるようにした。これを見ると、A, B, Cの3名は、結局、この語彙力不足が常に足を引っばることになったようで、その後の定期テストにおいても、他の生徒ほどの成果をあげることができずに終わっていることがわかる。

生徒たちに少しでも英語の学力をつけてやりたいと願いつつも、なかなか効果的な指導ができない。再テストという手段も、生徒によっては劣等感を育ててしまうことも考えられ、特効薬ではない。筆者としては、こうした生徒たちと少しでも接触する機会を多くするため、英研に呼んで話をしたりするのではあるが、そのことも場合によっては、生徒にとって苦痛となるかも知れない。せめて、彼らが英語がらいにならないよう、英語の授業に参加できるように、努力を重ねたいと思っている。

## 15 生徒たちの反応

学年末を迎えた英語の最後の授業で、15分間ほどのアンケートを実施した。この結果を〔資料-8〕にまとめてみた。

「英語が(大)きらい」な生徒が24%いるが、「英語の授業は(とても)つまらなかった」という生徒が10%、「(まったく)勉強しなかった」生徒が16%であったので、授業を担当した教師としては満足すべきであろう。ふだんの授業で支持が一番多かったのが、「まとめをノートに書くこと」であったのは、意外であった。これは、「まとめプリントのシリーズ」の支持率が4の項目の中で一番高かったのにも見られるように、学習している様々なことをすっきりと整理整頓して欲しいと生徒たちが望んでいることの現われのようである。アンケートの3および4の各項目についての評価を平均すると、最低が4-(3)の「英文レポート」で(3.17)、自由英作文は書く力を総合的に必要とされるため、生徒たちが敬遠ぎみであったことを示している。すべての項目に関する評価平均値をさらに平均すると3.93となり、「よかった」という評価に近い数字なので、中2の英語の授業については、おおむね、よい印象を持ったということが言えるように思う。

このアンケートを集計していて改めて痛感したことは、同じように授業を受けていても、生徒の反応は様々で、個人差が大きい、ということである。それは、〔資料-8〕のアンケート結果にも現われているが、さらに、このアンケートの最後で、英語の授業に関しての感想・意見を求めたところ、多くの生徒が「わかりやすかった」、「よかった」など肯定的な感想を書い

てくれたが、その一方で、「授業の進め方がはやりすぎ

## 16 結びにかえて

このアンケートでは、以上の項目に加えて、

「あなたは、どんな時に英語をやる気になりますか？ できるだけ具体的に書いてください」

「あなたは、どんな時に英語のやる気をなくしますか？ できるだけ具体的に書いてください」

という項目を設けて、生徒たちの声を聞いている。この質問に答えて生徒たちがあげた「やる気になる」あるいは「やる気をなくす」原因・理由を、次の5つに分類してみた。

### A：評価的理由

テストの前後、テストで点が良かった・悪かった、というように、テストで評価されること、されたことを理由にあげている場合

### B：内容的理由

授業でわからないことがあったとか、面白い内容だったとか、宿題が出たなど、授業のある・なしを含めて、学習の内容面を理由にあげている場合

### C：実用的理由

英語が使われている場面や英語文化に接したこと、逆に、実用価値を疑っているなど、実用面での理由をあげている場合

### D：情意的理由

気分がのる・のらない、沈滞ムードである、危機感を持っているなど、情緒面、意志の面での理由をあげている場合

### E：身体的・物理的理由

眠い、空腹であるなど、身体的なことや、授業が何時間目にあるとかの時間的な理由をあげている場合

あくまでも便宜的な分類であり、必ずしもこの通りには分類しきれないものもあったが、生徒たちの理由をこれに従って整理し直したものが〔資料-9, 10〕である。

さらに、これらを、意欲が増す時をプラス、低下する時をマイナスに数えて、それぞれの理由をあげた延べ人数を計算すると次のようになった。

A<sup>+33</sup><sub>-15</sub> B<sup>+33</sup><sub>-42</sub> C<sup>+19</sup><sub>-1</sub> D<sup>+12</sup><sub>-10</sub> E<sup>+11</sup><sub>-18</sub>

この数字を通して学習意欲をながめてみると、テストなどの外的なものが原因で比較的「やる気」をおこす

らしいということ、実用的な価値を見出して内的に動機づけられることが多いのがわかる。他方、身体的な要因は「やる気」をなくす場合の方が多い。学習内容では、わかりやすいか・むずかしいか、面白いか・つまらないか、などの尺度でプラスにもマイナスにも動き、同様に、その時々感情の動きの上下に応じて、「やる気」が上下することがわかる。

教師サイドとしては、身体的なことがらや情緒面に

は立ち入ることができないので、評価的理由および実用的理由を利用して、生徒たちの動機づけをプラスの方向に向けながら、学習内容を面白く、わかりやすいものとする努力を重ねれば、生徒たちの学習意欲を全体として上方へ押し上げることができると考えられるのである。

この分析をもとに、次年度もいくつかの試みを工夫したいと考えている。